

九九

朝日あさひに匂におふさくら花はなも

大ミオヤの御惠おめぐみによりてあらはれし色いろとおもへば、咲まく花はなをながむるにも御慈悲ごひの
ほどぞ感かんじらるゝ。

若わし一ひとたび

大ミオヤの光ひかりりに接せつし光明くわうみやう中ちゆうの人ひとと化くわするときは、觸目物じよくぶつものとして佛ほとけの御惠おめぐみにあら
ざるはなしと觀くわんせられむ。さて其そのちは絶たえて音信おんづけをせざりしは、大おほいに謝しやする處ところなり相
も變かはらず

大ミオヤの光ひかりの道みちを宣傳のべつたふことに仕つかえまつりて一日いちにちも息いきふことはなかりし、二月ふたつき中
旬じゆんに栃木縣とちぎけん下かより下總しもたもへ歸かへり自坊じはうにて四日間歸敬式しかんききうしきを執行しゆぎやうし直ただちに其そのもよりの教會所けうくわいじよに
て會くわいをもよふし廿日にじふにちに當地たうちに來きたり引續ひきつづきて光明くわうみやうの宣傳せんてんにつとめ居をり候もとふ。つゞきて京都きやうと
より九州しゅうへと存ぞんじ候もとふへども東京とうきやうにて授戒會じゆかいゑ其他傳道そなたでんだう上の事ことにつき此月このげつ末まつに歸東きとうせざる

を得ざる事に候へば一たび東京に歸り候。就て兼ての約束も少し延引に相成候。何れにしても將來、傳道の意志及び事業のため貴氏に囑することは已に決定致し居候間右御意得置あられ度候。

將來の宗教家の事業は自分が理想せしようにせざればならぬこと、存候。貴氏が現在の宗教家が只虚榮に流れ營利に汲々として眞實救世の實を擧ざる俗流と共に流れるるように意を用うることはよし。然れども進んで、如來の光明を得て世の爲め人の爲に身を犠牲に供して仕へんとの志しはなかるべからず。一たび閑靜に入て精神を鍛鍊するは已に釋尊の芳躅たり。光明を得て而して後に光明的活動すべきはまた釋尊の範を垂玉ふ處なり。貴氏が爲に將來の宗教家としては適當の職務とおもふ事業これあり候。何れにしても一たび下總の自坊に來りて修行の上に、また其事に従ふべくよろせられんことを望み候。大ミオヤは將來宗教家に對していかにしてはたらかせ玉ふ哉は、眞實心に住する人に啓示し玉ふべく候。將來に於て宗教はます／＼必要なり。

時代に適したる宗教は必ず行はれん。むかし我宗祖大師、黒谷に隱遁し玉ふ時の叡山の僧徒の虚勢いかに盛なりしぞ。いかに盛なりしも實なし。我宗祖の素朴黒衣にねづみの大衆衣を身にまとひ金剛ぞうりにて歩行せし大師の意志は數百年の後にも尙行はれつゝあり。

然れども眞實世を救ふの一心なく、只虚榮を榮とし明照大師の號を引擔ぎまわりて御祭主義は還て財産家の息が伎者をあげて一時の榮花の夢に祖先傳來の産を蕩盡すると恰も類似の點なきにもあらざるべし。

七重八重花はあれども山咲の實の一だになきぞかなしき、とは古人の歌。

眞實實の有る宗教こそ眞實に世を救ふなれ。

願くば潜勢力を養ふて時の來るを待たれかし。

何れ東へ歸りてのちにまた再び西に來る時にか、左なくば東にて御よび申ことに爲か後便に譲り候。然れども將來貴氏の實行すべき途は轍をつくりつゝあり候。

まづは本月京都へゆくことが出来ざるまゝ御ことはりかた／＼申述候。勿々頓首

一〇〇

御書翰によれば先頃來會て病魔に襲はるゝ處となりしとは、嗚呼八苦充滿の世なるかな。隆尊宿よ、はやく未だ命魂死魔のために奪略せられざるに先だちて、南無の一念に業障深重なる命を投じて
無量光壽の如來中に復活せられよ。

其精神にして已に光明界中の人とならば此四大の假合物任汝業に隨ふて何の慮る所かあらむ。此四大和合の依身終て初めて是淨土の人たるにあらず。已に一念如來心海に歸しぬれば精神已に是淨土の人たるなり。已に淨土の人とならば已に生死を超絶したるなり、起絶生死の分に候。無常の風いかなともすることなし。

一〇一

此念珠は如來光明主義の會員の必携すべきもの、此一連に宗教の要を示せり略解

を讀でしばらく意を領し玉へ。若し大みおやより御引あげの急なるあらば潔よく命を奉じて、御許に詣で、また再び請願して此有縁の國に還來して此光明主義を宣傳して闇黒裡の人々をすくへよ。

尙申述度事は後便に譲り候。光陰の鬼に迫まられて縷々するのいとまなく候。

念珠の説あかし

此念珠は宗教の眞理なる、ナムアミダ佛の要義を表示したのである。ナムは己が一心を献げて歸命信賴すること。アミダ佛は絶對的偉大なる力を以て救ひ玉ふ如來である。上の三顆は如來の三身、次の小なる兩方のは法身の一切知と一切能にて、次の兩方の六顆づゝは十二の光明、次の二の小顆は報佛の慈悲と智慧にて、下の三顆は衆生南無の三心信と愛と欲との意である。斯一連に如來の聖心と衆生の心とが合一して救はるる意義を表はしたのである。

如來三身。アミダ佛は宇宙に最尊第一に在まし本一體なれども法身、報身、應身の

三身に分れて在ます。

法身は天地萬有の本體にて萬法を統制し萬物を産出し宇宙全體を通じて其體とす。故に宇宙は活る如來である。衆生は法身から分れたる分子である故に佛性と云ふ佛に成り得る卵子である。然れども其まゝ自然に佛に成ることはできぬ。衆生佛性の卵子を慈悲と智慧とにてあたゝめ孵化し佛として下さるのが報身佛である。報身佛は宇宙最高の光明永しに輝ける常樂世界に在して麗はしき相好を具へ光明普く十方世界を照して皈命信賴衆生を攝め取て彌陀同體の身として下さる如來である。應身佛は報佛の分身にて此世に出て人身を以て衆生を常樂に導びき玉ふ教主釋尊である。教化畢て八十歳にて本の光明界に還り玉ふ。斯三身に分れたるも本一體である。一切知一切能は法身佛が天地萬物を開發するに秩序を整へ生活活動せしむる自然の働である。

十二光。如來の靈德無量なれども斯十二の中に悉く攝して遺すことなし無量無邊無

礙の光は宇宙に充滿する體相用の三大である。

無量光。宇宙の本體諸佛の本地萬物は斯本體に本づきて存在す。此本體を悟らざるを衆生と云ふ。斯如來心を體得するを諸佛と名づく。

無邊光。相大。如來藏に一切萬法無邊の性德を具して缺る事ない。而して斯光にて萬法を照す。此を證るを諸佛一切智と云ふ。

無礙光。如來の一大靈力である。一方には天地萬物の造化の大用にて一面には衆生を攝取の爲に應報の佛身土を現じ衆生を度したまふ。斯光が一切諸佛菩薩諸善萬行の一大原動力である。斯三大光が宇宙に遍く互りて常に大活動を爲し天地萬物を開展しまた一切衆生を佛界に攝め取て成佛せしむるのである。

無對光。本覺の大みおやの許を迷ひ出し眞に背き妄に隨ひ光を失ひ闇にある衆生を憐れみ絶對威力を以て衆生を攝めてミタ同體のさとりを得せしむ。如來に同化する時は彼と我との相待でなく絶對的に同體不二の身と爲て下さるから無對と云ふ。

炎王光。喩ば大火炎を以て諸の不淨物を焚盡すが如く如來大威神の光は衆生の煩惱と業と苦とを焚盡して諸佛の功德を與へ玉ふ故に炎王光と云ふ。

清淨光の下四光は衆生の心を靈化する妙用である。

清淨光。汚れの心を淨めて美化する光。私共の六根は外界の色聲香味觸の六塵の爲に染汚され六慾の爲に卑劣に流れ肉慾に溺れつゝに惡き習慣は其性質までも汚すことになる。然るに六塵の汚を淨めて日に新にして六根清淨に快よく潔よくして下さるは斯光である。

歡喜光。苦を抜き樂を與ふ。人生苦惱多し生存競争の激しき世に種々の苦悶は逼來る中に於ても春風駘蕩ときはの春に心の花開き身は此土にありて神は淨土に逍遙法喜禪悅の樂みは斯光の賜である。

智慧光。迷を轉じに悟を開かしむ。無明癡闇の凡夫一寸先が闇である。然るにさかしき智は還て己を欺きて斷常二見の坑に陥り易い。喩ば日光出れば萬境一時に照す如

く、佛日の光明の下に眞理にかなふ智慧も生じて一切の佛法をさとることをうるは斯光である。

不斷光。私共の惡き意を轉じて善き心に靈化して道德的の行爲をなさしむるの光である。人間一日八億の念が私慾の惡意より衝き出す念は悉く惡道に向て盲動するのである。若し斯光にて心意一轉して如來の聖意より出る心として身と口意に於て作す業は皆自ら佛心と相應し佛行となりて日々に光明中の働きをなさせて下さる。

難思光の下三光は光明生活の三階位である。

難思光。喚起の位、初心の輩は如來の光明とは何なる状態なるかは未だ經驗せざることなれば量り知ることができぬ故に難思と云ふ。若し光明の眞理を聞て専ら稱名しまたは冥想觀念讚美祈禱等を以て信念を養ふ時は早晚機熟して微かに靈光に接して心の曙となるこれを喚起の位とす。

無稱光。開發の位、信念稍進み内に薰發の因あり如來慈愛の光に催されて歡喜の一

念に如來心と融合し信心花開きて光明を實感す。其妙味は自ら證知するも他に説き詮はすことは能はぬ故に無稱と云ふ。

超日月光。體現の位、已に光明中の一なりてからは日々三業に爲すことは、悉く光明を身の行爲に現はす故に體現とす。如來は心靈界の太陽なれば超日月光と云ふ。靈光の下に生活々動することである。

智慧と慈悲とは報身佛が念佛衆生を攝め取玉ふ左右の御手である。

衆生 南無の三心。如來の光明を得んと欲せば必らず三心を具ふべし。即ち十八願の意にて至心、信樂、欲生の心である。至心は眞實心にて如來の靈心と合する衆生心の形式にて信愛欲は其内容である。

信は如來の不思議の靈力を信じて全心を献げて信賴するので信に三位あり仰信は一心一向に不思議の力を信じて疑慮なき者は自ら佛心と相應して救はる。解信は如來大願の意義を領解して信を立つ。證信は實習の功果として光明を實驗して信を得。何れ

にしても實に信じて疑なきを要す。

樂は愛樂 感情の奥に佛心と融合し全く如來を我物となるは愛である。如來を愛するに三位あり。一に親の如くに愛慕し二に異性に對する戀愛の如に一心に佛を戀愛し三に如來を大なる眞の我として愛す之を愛樂とす。

欲望 宗教心の欲望、眞善美の極みなる靈國に生じ佛と成らんと望みである。此に三位あり、一願作佛心、佛の子と爲らんと欲望、二に正しく更生りて佛子と成し時と、三に聖子の職たる衆生を度せんとの望である。此の三心は知と情と意とに於て如來心と合すべき衆生の心である。

念珠の表示を略して明しぬ。願くは諸の賢者と共に大みおやの光明によりて今後世を通じて安寧を得んことを祈る。佛陀禪那歛しみ言す。

一〇二

御端書によれば廿八日無事に着院候との事先は安心仕候。

愚衲事出鎌致度存候へども日々傳道上の忙しきにまゝならず候。萬事小坂様に御依頼候やうにせられ度候。

さて何は兎もあれ、先第一着に

念佛三昧の修行最も急務にて候。無常迅速念々に時光遷流して須臾も止まることなし。若し一日空しく過さばまた再びあひがたし。

念佛三昧とは、口に専ら佛を稱へ意に一ら佛を念じ念々常に彌陀を忘れず。

彌陀は本より已來常に衆生の前に在ませり。自ら未だ心眼開けずして之を観ること能はざるなり。衆生心水澄む時は如來の靈月永しへに感應せん。

愚衲昔し廿三歳許の時に一はら念佛三昧を修しぬ。身は忙はしなく事に従ふも意は暫くも彌陀を捨てず。道歩めども道あるを覺へず、路傍に人あれども人あるを知らず三千界中唯心眼の前に佛あるのみ。

一ら佛の相好を憶念し奉らんとするもろくの妄想現前して或時は煩悶に耐へざ

るあり、然れども久しうしてつひに妄想現を苦とするに足らざるに至りぬ。寤寐に只佛の相好を觀じて捨てざるに或は定中に妙相現するあり。或時は佛の相好なく只黒き相を見るあり。

正念と妄念との闘争随分奮戦しばしなり。何れにしても、いか成處までも精神の修行敢爲にあらざれば成じ難し。むかし宗教家の大偉人たちに於ても悉く困苦を窮めたるは身體の修行よりは寧ろ精神に於て眞理の光明を發見せむとの爲に摧勵したる苦は深かりしならむ。

一心に専ら念佛三昧によりて活る眞門に入るべし。是爾が一大急務なり。

時梅雨にあり道のため御身體を自愛せられたし殊に病後なれば特に自重せられんことを。勿々不具

別紙御世話人の南部様へ貴氏の爲に御たのみ申ことをしるしたることなれば持参して萬事御願ひ申ことにせられ度候。

御深切なる御方にて候。

一〇三

此ころいかゞ候哉。

申述度こと多々なれどもいつでもせはしなくして意を得ず候。

只

大みおやの御いつくしみを念じて光明のなかに生活せられんことをのみ是祈候。
餘は兎に角にも

此ころ石塚はいかゞいたし候哉、もし折あらばしらせられ度候。

一〇四

古人曰く、池を穿て月を待たず、池成れば月自ら來ると。實に彌陀身心遍法界なれば行者の心想だに淳熟すれば彌陀の靈月は常に宿らむ。何の疑かあらむ。

只須らく三昧に住すべし。

行住坐臥に如來を憶念すべし。

右習志野の草庵の行人衆に告ぐ。

又奥村氏に告ぐ。

衛生の爲に或程度迄は働くもよし、分に過しては宜しからずまた熱き時間は避くべし。

生大根をおろしてしばらく汁にして食後凡そ盃に半分位宛を用ゆべし。能く食物を消化し胃をたすく。

一〇五

本願力

本願と力。先づ本願の意は、大ミオヤが一切の子に對する願望である。世間でも親が子に對する望は子をして親自己と同一の位置に到らしめんとす。而して自己の志を紹介しめ第二の自己たらしめんとするにあり。大ミオヤも亦然り、一切衆生をして作佛

せしめて圓滿至善ならしむるにあり。力とは如來の一大靈力一切の子らを解脱靈化せしめて圓滿に養ふ力なり。此力法界に周徧す。此力太陽の光熱化の三線を以て地上の萬物に及ぼす如く、智慧と慈悲と靈化の三能を以て衆生界の心靈を開悟與樂靈化するの能あり。

如來の一大能力を以て萬物に及ぼす二面あり。一方には大靈より萬物を發現能生養育する力となる。是天地萬物に及ぼす能力である。他面には天則秩序の下に一切萬物を進化せしめて人類の精神生活となる時は心靈を開發解脱して靈界即ち涅槃に攝取する靈力あり。本願力とは自然界の生物を靈界に攝取する力を本願力と云ふ。

大靈は右の手を以て蒔たる種を左の手を以て攝取するなり。天則秩序の中に因果の法則と爲りて萬物を能生能養するは其目的は高等なる靈的生命として永遠に歸趣せしむるを目的とす。目的が即ち本願なり。

其本願を示す爲に往昔法藏比丘と顯はれ十劫正覺と現じ、また三世諸佛となりて世

に出現す。歸す處は大靈の目的なる本願力の出現に外ならず。

衆生の方より

如來本願力は常恒に十方に徧在す。然るに衆生何にして此靈的光明に攝取せらるべき。是衆生心が如來の本願力に契合して攝取同化する。是ぞ大ミオヤが法藏と示現して本願四十八の中十方衆生至心信樂欲生の三心なり。

信……智力

三心の内、至心樂……感情

欲……意志

此三心が如來の大靈力と目的の靈力と契合する心能なり。
至心は形式にして信愛欲は内容動機なり、能く研究すべし。

圓具教精神主義

斯教の立方と昔の聖道家の此土入聖とは大に其趣を異にす。先づ斯うである。

宇宙全體悉く如來大光明中ならざるはない。その大光明中に有つて其中に自から二面ある。宇宙は一面よりは自然界、他面は心靈界。前者を娑婆と曰ひ後者を淨土と名づく。娑婆本より大光明中である。具存とは娑婆にも淨土にも如來の身心充滿せぬ處なきを云ふ。

一〇六

光明照さぬ處なく、如來を離れて娑婆の實體はない。然して衆生も本如來の子である故佛性具て居る。而て本願の光明に攝取せられ同化せらる時は身は娑婆に在て神は光明の生活である。然れども身は自然に縛せられて娑婆に在る。理想だけに光明中の人、淨土にすみあそぶ想あり。然して彌命終る時は今まで理想に觀じて居つた光明界が今度は實現と成るのである。であるからかたちから見れば娑婆と淨土と異なれども精神から見れば何れも同じ如來大光明中である。大光明中に在りながら肉眼は娑婆を見て居る。宇宙同一の如來中にて娑婆と淨土との實體にかはりはな

いのである。これが圓具教と云ふのである。それは法界の眞實義なのである。善導大師元祖大師もそれは確かに認めて居つたのである。けれども衆生が分らぬ故に方便して宇宙が全く二つあるように教へたのである。

此土入聖とはわけがちがふ。一切處如來光明中であるから現在から光明中の生活に成るのが圓具教である。

さればとて全く無比莊嚴の淨土無と云ではない。全く有けれども十方に遍在して如來心と相應すれば經驗できる。たとひ實驗できぬとても大光明中の生活にはなれる。次に眞宗の信心歡喜乃至一念至心廻向即得往生往不退轉と眞宗で云信心獲れば此身此まゝ即得往生、これ矢張り圓具教の一分である。死なねば往生できぬと云のは超然主義である。また圓具教には精神には現在ながら光明生活にて眞實莊嚴の淨土往生は身の死後である。光明名號經に彌陀は本有法身常住無量壽佛、斯土の衆生に方便法身を現じて本覺の淨土に攝取するにも前と後とあり。法藏因位の十劫正覺より

無量光に攝するは舊約にて釋迦を通じて無量光に攝するは新約である。舊約は西洋の猶太教と同じく淨土は全く死後の別天地とす。新約は精神的に現在より光明中の生活に入る事ができる。

十二光の中初三光は如來即ち眞如の體相用の三大にて法界に徧在せる大靈の體と大智慧と大靈力とである。

一〇七

念佛行者との比較、若し心が已に彌陀同化した上は、たとひ口に稱名せずとも其一切の作爲悉く念佛ならざるなし。事業即ち彌陀の聖意が業に現はれたることなれば還て立派な佛行であり候。念佛と云はゞ口に稱ふる計りにあらず如法(念佛)の心より爲す業は佛を身の業に現はすことなれば、それは口已上の念佛にて候。一體從來の念佛者は只口計りを重く見て身に佛行を爲すを敢てせざるは發展の度低きなり。

一〇八

日外之書中錢孝直とやらの臨行の時甚麼放他不處の處か有る云々——

禪臭の符號は唐人の寢言で陣ぶん漢ふんだけれどもつまりかうだらう、身にも心にも佛法にも縛りつけられては終に盡未來際成佛は出来ぬ、取もなければ捨てるものもない本來清淨の佛であるから元明妙覺なり其外に揀擇すべからず敢て任持すべきものもない。一切うちすてゝ一法も存せざるに至らば本來の佛が現前す。本來佛であるから何にも引つけさへせざればよいものである。引つけるから自縛で佛となれぬのであるとの謂ならん。

辨策のは前と正反對である。無想無念でなく無執無縛でなく想て想ふて想寸間も離さす即ち彌陀を想て捨てぬのである。無念でなく念々彌陀を念じて暫らくも離さす無執でなく執持名號執持して常に離れず、無縛でなく我と彌陀と縛つけて少しも離れぬのである。彌陀に縛られて居らるゝ身のつらさは寒中の寒さ凌ぎに無間地獄の温な處へも行こと出来ず炎暑の折からも寒地獄へ行て見ることも出さず、行住坐臥彌陀に

縛られて寝るも起るも心に縛り付られたる彌陀は離すこと能はざれば止なく彌陀と共に寝ね共に起き、彌陀に縛り付られたる身の不幸一生離るゝこと能はざるのみか此身はほどけて離されること即ち放免の期限はあるなれども心は彌陀に縛られてはいやな極樂へ拘引されて往かざるを得ず。

それでも習慣と云ものは妙なもので彌陀に縛り付られて晝夜に離されぬ身と成つてもそれが常と成てしまへば左のみ苦にもならぬことよ。

彌陀と縛りつけたる我心始は自分が彌陀を負ふて居る様に抱て居る様な氣がしたけれども、實は彌陀に負はれて居たのじや抱かれて居るのじや。自分の様な横着な奴にや持て来いである。何處へ行にも彌陀に負はれて行のだから樂なものである。抱かれて居るので在るから氣樂なものじや。

昔は辨榮も禪宗流に獨身生活ほど氣樂なものはない、彌陀とのくされ縁を切て仕舞つたならさぞかしさつぱりしてよいと思ふたこともあるが今日に爲て見ると左様でな

い。何程の大儀な事でも彌陀の力でやつて呉れる。苦があれば慰めて呉れる。寝かし
て呉れる。樂な事よ。

何事にても皆其力でやつてもらふた方が實に樂である。矢張り彌陀と同棲的に家庭
を造た精神生活の方が得策である。而して

お前百まで私しや九十九まで、共に白髪のはへるまで、ではない。御前無量壽で私
無量壽、いつも白髪ははへせぬ。と云文句で

偕老同穴の契ではない、攝取同化の無上覺となるのである。

一〇九

一念不生の安心と寫蘭の安心と、若し別とせば未だ安心を得ぬのである。寫蘭の安
心即一念不生である。註。鐵翁蘭を寫す安心を問るに答

暑しよに入り大おほいに熱あつさを感じかん候さふらふ。何いづれ久ひさく本尊ほんぞん様さまにも御無禮ごぶれい候さふらふ。間本年八月ごわつは拜はいしに歸かへ省せい候さふらふ。

山口やまぐちさんには定さだめて邊土へんどにて御不自由ごふじゆうならなかねどもむかし釋尊しゃくそんの入山にふさんの例れいに倣なぞひて辛抱しんぱうなされんことを望のぞみ候さふらふ。おもふに何いづれの地ちにても宗教しゅうけう上精神じやうせい上の新舊しんきうの過度くわど未だ判然はんぜんせぬ爲ために岐路きろに迷まよふて居ゐる輩やからが多く候さふらふ。現在げんざいを通つうじて永遠えいゑんの光明くわうみやう主義しゆぎ。死しを豫期よきしての念佛ねんぶつにあらずして靈れいに生いきんが爲ための念佛ねんぶつ。

本もとより宇宙うちう本體ほんたいは絶對ぜつたいである。衆生業識しゆじやうごふしきより認みとむるは、人間にんげんは人間丈にんげんだけに犬いぬは犬丈いぬだけ虫むしは虫むしだけに世界せかいを感じかんじて居ゐる。如來にょらいは佛智ぶつちを以もつて法界ほふかいを悉しつく淨佛國土じやうぶつこくどと觀くわんじ玉たまふ。

大經だいきやうの末すえの佛智ぶつちを信しんずる人は化生けしやうし罪福因果ざいふくいんぐわを信しんずるも未だ佛智ぶつちを信しんぜざる人は胎たい生しやうすと、此文このもんに深ふかく味あじはふ處ところあり。後便こうべんに讓ゆづり候さふらふ。勿々さうさう

先月の暴雨にて其地並に信徒の家屋等殊に人畜等には被害云何候哉。愚衲先月十日頃朝鮮より歸り直に九州地へ巡教いたし鹿兒島より歸り當寺において五重法會つとめ候。何は兎まれ人生の一大事は

大ミオアの御恩寵を被りて、靈を養はるゝ處にあり候。念佛は死ぬ爲ではなく生くる爲にて候。生くるとは生るゝ事、生るゝとは人々本具の靈性が無量光如來の靈光に觸れて發生する事にて候。鶏卵が雌鶏の懷にあたゝめられたるために孵化する事にて候。産たての卵の中の生命はまだ活動せざるものに候得とも雛子となれば活きて來たものにて候。故に死ぬ爲でなく活る爲と申事にて候。

皆別條なく候哉宜敷傳られ度候。

一一一

先月十九日當朝鮮に渡り候。

光陰甚だ疾うかくすると一生空しく過易し。

一心しんに如來にょらいの大威力だいりきを被かむりて道みちの爲ために仕つかへ奉たてまつらんことを望のぞみ候まう。

先般せんぱん申入まをしいれ候まう發心はつしん者しや尼僧にそうの志こころざし云何いかんに相成あひなり候まう哉や、若もし因緣いんねんあれば大津市下片原町おほつししもかたはらまち念佛寺ねんぶつじ(尼寺あまでら)にて弟子でしにいたし度たしとの事こと。貴坊きほうより本人ほんにん及び父方ちちかたの意見いけんを照會せうかいして念ねん佛ぶつ寺じに申越まをしこし候まうことに御頼ごたの申まをし候まう。

先まづは要用えうようまで 和南わなん

一一三

其後そのご云何いかん哉や。光陰くわういん疾過じんくす、只憾ただうらむらくは自信じしん教人けうにん信之傳道しんのでんどうす、まざることを。

何なには兎とまれ如來にょらいの光明くわうみやう宣傳せんでん是我生命これわがせいめい、時教相應じけうさうおうを要えうす。世よは既に開ひらけたり、佛敎ぶつけうの新傳道現代教育しんでんどうげんだいけうと聯絡れんらくの出來できる宣傳せんでんを以もつて闇やみに迷まよふ人々ひと々を教化けうげいたし度たかき候まう。

宗教しゅうけうは人ひとの精神せいしんを眞善微妙しんぜんみめうに致いたしむるにあり極樂ごくらくは是其極致これそのきよくち。若もし彌陀みだの光明くわうみやうによらざれば能よくする所ところにあらず。處々しよしよにて講演かうえんせる筋書すじがきあり參考さんかうの爲ために送り申まをし候まう。

ミナによろしく。例の帳簿ちやうぼはコチらに預あづかり在あり候まう。

本月中朝鮮來月九州十月は京都附近に定まり候。

一一四

清淨光裡に新年を迎へ不斷光中益々向上せられんことを望候。

暮にせまりて歸京候。

里人に慈悲のみむねを宣傳いたすに準備して呉れ度候。

此頃いかにして在り候哉聞かまほしく候へどもつひに目前の事にせまりて不得意候

只如來と共にありて世の爲め人の爲に竭されんことを願はしく候。

よろしく傳られ度候。

一一五

欽啓 眞宗の寺院にて越後國葛儀福明寺の御住職なる佐々木と云方が最も熱誠なる
求道者且つ修行者、愚納當地方巡教に暫らく隨行候。今回京都同宗本山に安居に
出づるに先だちて一ヶ月許念佛三昧修行いたし度との志願甚だ隨喜候。依て善光寺

にて修行候やうにすゝめ申候間、供養候やう、また共に出来る限り三昧修行候ことにいたされ度右御頼み迄に申進候。

先は當要如是御座候。勿々和南

一一六

漸く暖氣と成候折、三昧の修行を昨今いかゞ候哉

行住座臥時處諸縁を嫌はす一心専念口に稱名を唱し心に彌陀を念じ三昧成就して自ら修られんことを勸む。

別封得度者の爲に此を運び下されたし。

信光とは例の小笠原島に在て修行する行者、即前鎌倉千手院に在しものである。

別封を、愚柄が印は福田氏に預け置候に付同氏に就て捺印しそれから小金東漸寺に持参して願はれたく候。

一一七

欽啓 兼て話し置候 熊谷氏三昧行道の爲め善光寺に籠る様に愚衲より申進候に
付修行の外護いたし呉られ度

また俱に道にすゝむべき談をいたし候はゞ宜ろしかるべくと存候。
先は御たのみを傳ふ 勿々 和南

一一八

先日折角御出之砌不在にて御氣之毒に存候。

七日晚漸く歸京候。

來月一日より七日間知恩院にて念佛三昧會其準備にて忙敷候。

起てよくとの

如來の勅命の聲いかに聞ゆるや

問

如來の慈光と云物の其實在を認め得らるゝや。

如來の光明と衆生の心との區別と關係とか確乎とわかりなさる哉。此と同様な事に就て法然上人と叡空上人との争が有たらう。戒法の事に就て空師は心法戒體とて戒の體は人の心に屬して居るものであると。然師は然らず戒體は色法であると、其故は天台大師は戒體は無作の假色即ち起さずんば止なん性は無作の假色であると。此義能く會解しうるや。

若し戒體が全く心法なれば心が本戒であるから誓つて受すとも自分で行はる筈である。然るに作法を待つて實際に發得すれば初めて戒體が働ける様になる。

發得すれば心の中に本尊と成て自己の勝手の心意を制裁するものである。意が物を殺さんと衝動すると其奥の方から之を制裁する力が突然と動き出づ。

朝寢して居ると胸中に伏在する戒の力が己を刺激して覺醒せしめて起きよくと囁く。心中に安置しておくけれども心其物ではない。故に無作の假色と云。

念佛もまた然り我心を離れては我が爲には佛の光明また恩寵が感じられぬ。然ら

ば是心作佛是心是佛本來の心其まゝが佛なるか。否然らず、一心に佛を念ずるが故に
 佛光我心に加はる故に我心佛と作る。如來の恩寵全く我全體に入る。爾時に我な
 くなりて只佛心のみになる。今物理上の例を以て云はゞ吾人の心は闇黒な而して冷た
 い切炭である。此黒炭其まゝが火ではない。若し此炭に火が燃へつく時は炭が忽ちに
 變じて眞赤にまた暖熱になる。此炭を離れて火を認ること能はざる炭全體が火聚と化
 す。然れども炭火にあらず火もまた炭に非。而して炭が火と爲り火が炭に在る如く炭
 を離れて純火を認むること能はず。爾の如く人の心を離れて如來の慈光を認むること
 能はず。然れども心本光明に非ず。

たとひ世界に一點も火が發現してあらざるも火の大なしと云ふべからず。如來の光
 明もまた然りたとひ世界中に一人たりとも如來の心光に觸れて居る物なきと云とも本
 々如來の心光法界に充滿せるの眞理たること否定する能はざるべし。火大法界に周遍
 し縁に隨ひ業に循じて發現す。如來の光明もまた然り、思ふて知るべし。

既に吾國民も理性大に開けたり宗教も時期相應して有爲の人々を指導せざるべからず。

現在を通じて永遠の光明主義

永遠の現在主義、如來の大光明主義

若し此光明を以て國人を照すにあらざれば日本は闇黒の四趣界に化し去らん。

就て今回己が主義主張に便理の道が開けんと欲して、今回相模國に無量光寺と云時宗の本山あり（遊行寺に非ず）

當寺は昔から淨土宗の僧が住職せし由。

今回愚柄に其寺の住職せよとの事。

此に就て外に望ないけれども主義主張に己が理想を實現せんに淨土宗からも束縛うけず、また藤澤の本山からも關涉を被らぬやうにして新らしき主義主張の爲に大に宜

しからんとおもふ故にそれは其住職になうとおもふ。就て相談いたし度事も有之候の
さればとて敢て至急も要せず候。

先は歸京を通知かた／＼ 草々

一一〇

せはしないから委細は後便に譲り候。教義上の事は淨土教義を送付候間御披閱せ
らるべく候。

第一は自己の證入にて候。また餘暇あらば讀書せらるべく候。將來文章傳道も要
すべければ文章を習ふもよろしく候。

延引ながら返報までに 勿々

一一一

實に光陰は疾し。うかくできぬ。

發心者に能く練修させよ、共に／＼何事でも能く鍛はねばゆかぬ。

目的は疾く光明中の人と成て、大ミオヤの子としてのつとめ、世の同胞をみおやの子たる人とする處にあり。自ら人間の子のみではゆかぬ。自ら佛の子と成て世の同胞をみちびくにあり。

朝はやくから少なくとも大薰香一本の一心不亂の念佛せねばゆかぬ。愚衲杯が發得する迄には青年時代には山に入て晝夜聲のあらん限り唱つゞけたのである、力のあらんかぎり。どうしても只理窟ばかりこねまはしたのではためである。農業でも理窟丈では一粒の米も獲られぬ。自己の人格に結ぶ果も三昧實行にあり。

自己に結ぶ種子を世に傳播する處に目的あり。

光明讚は斯主義の學説の骨子である。此の要解をかいて見せよ。

無對光と炎王光丈け解説の要をしるして試みよかし。

鈴木もかわい想な奴だから遠く精神の保護してくれかし「名古屋教區の講習今日にて済

一一三

十七日夜門司乗船朝鮮に行き候。朝鮮は初め釜山知恩寺にて候。七日間。若し要用あらば京城本町開教院にて山崎宛申越され度候。

貯金帳は漸次に入て置事にいたす事。すべて金は光明主義弘張の資料なれば其つもりにて使はれ度候。

只自信教人信、如來光明主義の爲に一向に勤められんことを希候。

曾ての手紙に六實の和助の娘子尼僧に志しありとの事、大津市下片原町念佛寺と云尼寺にて希望有之候に付其父母及び本人に御談合之上にそれへ呉ることにせばいかど、此方は愚納に切に申込まれ候故愚納引受てよろしく候。

若し承知あれば同寺に貴坊より書簡を以て申越の上同寺に本人を遣はすことに運ばれ度候。

京都も近き事なれば學校へも入てやると申され候。

それは京都にて修學すれば本人も仕合せにて候故よくすゝめても同寺に使はす事にせられ度候。其父上も信仰深き事、本人も定めて念佛を悦ぶ尼と成り而して如來の慈悲を人々にも願ける事と成候はゞ實に有がたき事にて候。

先日せんじつの光明主義者の清規、アノ通り執行爲らる様に候また追々實行の上に改正もせらるべく候。

光明主義者は一切たとひ幾千萬人なりとも同じく如來の子として同胞なれば財物等も誰彼の物となく皆如來の物として如來の道を傳ふるに資すべく候故にわづかなれども辨榮の所有不動産等も暫らく名義は辨榮の物につけ置くも實は主義の物なれば御身おんみに共に其つもりにて傳道者の爲に用うべき事に爲られ度候。其證書は他日確乎としるし置べく候。本より辨榮は此身さへ我所有でなく皆如來に献けたる物にて候。まして所有物に我有あることなく候。若しかりに辨榮の名義と爲てあるものあるは暫らく借たるものにて候。御身等辨榮の意を體して如來の聖意に仕へ奉る様に一にすゝ

め申候。
まをしるふよ

種々申述度事有之候へども後便に譲り申候。

使徒らへよろしく傳られ度候。

木内福田等其他へもよろしく。

一一三

田畑山崎辨榮の名義の分は全く光明會の所有なるを以て辨榮個人の所有にあらず
亦善光寺に附する物にもあらず。

辨榮は如來光明主義の宣傳が生命である。舊式の寺坏にある宗教上實際効能な
き坊主や寺杯を養ひ置こと大いに嫌ふ處に候。

依て土地山崎所有分は別紙の如くに所分致し度候。

此亦惣代衆に迄御話置下され度候。

山崎辨榮名義之畑の内一町三畝歩

此は光明主義宣傳の教師養成として當置し物なれば畑の小作は割合に安き故に若し教師養成資も未だ乏敷事なれば還て賣却候て金を以て養成資と爲る方が利なれば其方に致し度候。されども金の差支によりて賣却するにあらざれば相方共に利のある處より割出して讓ることなれば然るべくと存候。現今は香實は土地が廣く人少なき故に割合が安きなれども將來は必ず高く相成申べきことなれば相當に金を出しても將來の爲にと云志の方に讓る様にいたし度候。尤も金は一時でなくとも三年間に出來秋を以て夏作冬作の二期に六回にしても六分利を以て受取ることにても宜敷候。双方の利益ある様に惣代衆に相談の上に取計の程を望候。

證

光明主義首唱者山崎辨榮所有の田畑は全部光明主義宣傳相續者に讓與する者也之を

爲證 但し奥村個人の物にあらず主義宣傳者としての

大正六年四月廿三日

山崎 辨 榮^印

光明主義相續者

奥村 辨 誠殿

但

右善光寺惣代衆に御披露申候

山崎 辨 榮^印

一二四

釋迦如來此世に出現し玉ふ本意は、一切衆生の爲めに心靈界の太陽なる永遠不滅の無量光如來の本願力を教へて衆生の心靈を復活し、現在を通じて永遠光明の人と爲さしむるにあり。

願くば我同胞衆よ、受がたき人身を受け値ひがたき佛法に遇ひたり、幸に如來大悲

の本願を信じ光明の生活に入り意義ある人生前途に光明を認めつゝ向上の一路に共に進まんことを望み普く世の有縁に勧むるものなり。

一二五

光明會基本財産規約

一、基本財産は傳道師養成と傳道費とに支出すべき事

但し自餘に支出すべきことを得ず

二、基本財産は便利上不動産を動産としまた動産を不動産と爲べきを得

三、基本金より利得若しくは収入なる財産は甲と乙との教會に於て融通すべきを得

四、財産は會計員を置き惣代と協議して使用するべき事

基本規の第二條に依り五香烟賣却金驛遞貯金簿より布鎌村に於て田地購求すべき事を委囑す。

基本産を動産にては動し易きを以て相當の土地あらば不動産に換ゆる方が安然とす。

布鎌 田地賣買時價 約壹反代 金 百七拾圓内

小作米 九 斗

思ふに布鎌田地の如き價格全國に通じて無からん。十年の未來は倍の價格に騰貴せんは必せり。得る限り此地に於て購入する時は養成資に得る處あらん。

基本財産管理者 奥村 辨 誠

一二六

光明主義宣傳意得

宣傳師は從來の如く僧に限らず、何人にも全く分に光明獲得したる者は他に宣傳する資格あるものとす。

故に此光明に依て復活し如來の慈悲に動かされて自己の信仰を他人に頒布せざるを得ぬに至れば皆資格あるものなり。

如來を離れて自己の力にては信仰も宣傳も得らるゝものにあらず。

一二七

當麻山には收入も餘程ある故に此から成べく宣傳者を養成する様に致し度候。

五香の近村に於ても村々に位置のある信用のある徳望家の信仰を養つて宣傳者の資格をつける様に致され度候。

汝等一に如來の聖意と御力とを仰ぎて奉仕せらるゝ力を得る様に祈らるべし。

從來の坊さんが縱令妨げ様とも在家の信者を成べく作り置けば差支なし。

出來うる限り村々に世話人を立て禮拜式を教ふる様に盡力せられたく候。

來月大師參詣の折にも禮拜式をすゝめらるべし。

一二八

廿日付の御手紙只今手に接し候。實に其地の信者衆に會ふて如來の慈光を分與し度は山々に存候へども各地到る處に新らしき光明の宣傳に忙しなく、廿六日に當國を濟まし廿七日長野縣に入り講習會を開くべき約束に成候。故歸省出來兼候間、矢張り御こもりにして皆道俗老少を問はず如來の光明を讃歎し有難く十夜の報恩講をつとめて呉る様に望ましく候。而して一月に成りて五日間別時の講會をつとめる事にいたして皆に如來の慈悲を傳へ申べく候。間左様一同へ傳へられんことを希候。

特に五六の眞摯なる求道者見當り候とは實に喜悅此事に候。是また來月中旬頃迄またれんことを願はしく候。

是からの集りには昔流の十夜杯の様な形式を廢して只能所一様に讃歌を唱へ聖經を讀み、夫から共に法味を願つ様にして勤むるやうに致し度候。

從來の形式的法會には重きを於て勤むるにも及ばず候。其かはり内容を養ふべき眞面目なる集りを催す事に致すべく候。

辨榮は當時では他に出ても從來の十夜杯は避ける事にいたして居り候。であるから
そは習慣であるから、皆のよろしいやうにつとむる事にして呉れ度候。

貴坊にも定めて困る事とは存候へども、人は困難を何度も通過して初めて如何
なる事も困難を感ぜざる様になる。であるから一つ奮發して勤めて欲しい。

平素出來うる限り生命ある信者を作る様にして呉られたく候。
種々申述度事多く候へども面語に譲り候。

一二九

如來光明裡に四大輕安に修行せられ候様大慶此事に候。

さて此程之宗教上の意見は研究之發達の階梯として大に賛べき點有之然れども尙研
鑽を積まざれば精なる能はず。

十二光の圖式、清淨光より不斷光に至る感覺乃至意志の光能の解と、及び難思の下
三光宗教心三階の解も能く契合候。

無量光等の三光の如來の體相用の三大に配しまた無對と炎王とは神人合一即ち成佛涅槃の積極と消極との解釋につきては、宗教的宇宙論即ち形而上の學說なれば宗教哲學の問題なればよほど研究するにあらざれば完全なる學說と成りがたく存候。益々研究せられんことを望む。

其地に於ては書籍に乏しきには不便ならむ。

辨榮も爾後暫らく閑靜なる處に引こもりて著書に就くことにいたし候。

一三〇

昨日端書差出し候。殊によれば二日に高崎に出張候。而して九日に歸京候。十日には當寮にて光明會つとめ候。

聞く所によれば布鐐の會堂は縣廳の許可を得るに面倒の由相成候との事。同じくは俱樂部若くは信仰會所と云名目にして面倒でなく建築した方が宜敷候。有志に對しても會員として會員によつて建設するのは面倒でなかるべく存候。

土地は何に相成候哉。返事がまに合ひなくは高崎市堰代町櫻井別莊山崎宛すべて
の事情を通知相成度候。

然し何事にしても一の事を作すには容易ならぬ事に候。

一三一

日々彼此忙は敷て返書大に延引に成候。

三輪野江村より青年が入寺に相成候由

先第一に精神的に如來光明主義に感染する様にいたされ度事。譬ば鑛鐵にても鍛

錬してくつひには名刀と爲候。人間も充分に鍛のない者はゆかぬ。愚衲はむかし

若き折筑波山に登りて念佛三昧をつとめ諸處にてつとめたるも要する處精神の鍛錬と

爲るのである。はやく自ら精神的に復活して他に如來の光明を宣傳すべし。是宗教家

の職分である。依て發心者にも能く自ら範と成て共に養ふべき様いたされたく候。

鈴木は魔に障られたとの事。今は何分か改悟の色を現はし居るとの事。縦令寺には

居らぬにしても能く精神的に保護を加へてやる様に願はしき事。栗野の寮に留守居は然るべし。而して後に何分の主義の擴張につとめさせる様にせばまた然るべくと存候。

今回曾て芝學寮より淨大學に通學して本年卒業し今は研究生と成りて居る山口常照君が此學校の休暇中善光寺にて出來得べくは修養いたし度との事、愚衲に照會相成候。處は不便なる處なれども苦しからずは休暇中御靜養なさる様に返書差出し置候。間其地に着し候はゞ出來得る限り深切にしてあげる様に御たのみ申候。

若し能く信仰上の事を互に能く練り合ふ事にせば大に益する處あらんと存候。

同君は熱心家にて本年三月京都知恩院の別時中には大に感ずる處ありて大學の試験に差かゝりたるにも拘はらず一週間別時をつとめ候爲に態々と知恩院にゆきて別時をつとめ終り候。

愚衲は七月中旬後まで歸途處々を結縁いたし候。來八日より名古屋教區の請によ

りて講習會にいたり候。

もはや明後日の講義にて當地は御わかれにてあり候。先は當要如斯御座候。和南

一三三

其後云何候哉同じくは其村の方に於ても農間を利用して村の人の爲に禮拜儀を教ふる様にいたし候ならば好き事と存候。此程まで當麻にては毎夜男子許り三十名位集まりて盛んに練習いたし居り候。

當麻の學園は大ミオヤの加被力を仰ぎて世の爲人の爲に出來うる限り有爲の青年を作るべく吉田氏も盡力いたし居り候。

布鎌の會堂は其後云何に成りし哉、また光明會の教田の方は土地購求の事件はどの位までにすゝみ候哉。

愚衲もまだ暫らく學寮に滞在候間其もやう通知のほどを望候。

一三三

如來の聖意を世の同胞に布く爲に仕へ奉る此身なれば本より大ミオヤに活さる身として此血も肉も皆あなた物の物なれば悦びて血をも膏をもしぼりて献げることは悦ぶものゝ、夫でも限りある血と膏とである。學園に献んするも會堂に献ぐるも同じ血と膏にてある。けれども限りある。

布鎌の方も二百圓文は要意したれども其餘にはまだ用意していない。しかし此老たる身の血や膏をしぼり盡してまで左ほど活用なき會堂の爲に盡すは還て地方の人の罰を被むる因縁となる。實を云はゞ僧は法を施して財をば在家より施すのが法である。然れども俗人はまだ其法を知らぬ。貴坊はまだ法の爲に血と膏とを献たる經驗が無いから毫しも血と膏とを絞るは樂な物でないと思はで只郵書を認むる丈でできると思ふかしらぬがなかゝ其な物ではない。將來の傳道は勞働の神聖を重んじ自ら勞働賃金を投じて傳道資金としてすべての人々に勞働をすゝめねばならぬ。自分は其模範を示す爲に勞働賃を以て傳道してをる。貴坊も矢張りそれに倣ふて已後血と膏とをしぼりて

身と口とを以て傳道師と成るがよい。

また俗人は能く自から徳を積む爲に財を投すべきがよい。

今は學園とても本年來年二年に二千圓は少なくとも矢張り血と膏からしぼり出さねばならぬ。

布鎌の人々は禍なる哉。自から徳を積むことにはげます、只他人の血と膏とに依頼すること。

然れども在家自から覺知せず、宜しく教へて覺知せしむるやうにせられたく候。

立かけにのぞみて

一三四

先日は御苦勞に存候。

もはや今年のいのちも時々刹々にせまり候。

心を彌陀無量光のなかに入れて萬物を觀じ來る處に萬物光輝を放ちて何の處にも在

らせらるゝ靈應なることを感じられ候。

若し如來光明に照されて覺來りて始めて人生に無限の價值と無盡の意味あることを信じられ候。

世間の人茫々として衆務を營なみ年命の日夜に去るを覺らざる底の價值もまた死猫其價の程を識るなき處また何かの義なきを義となすあり。

人生は活動である。はやく大ミオヤの光明を信得して光明のなかに働くべき處に其仕事また價值あり。

世に澤山の財を積んでせい澤に日々貴重の生命を酔たぐれて葬てしまふほど價值のなき奴はない。

ついて日中は農家はせはしないから是から夜が長いから三人でも五人でもそれらに慈悲の傳播を爲るやうにしてほしい。

始めはいかにいやでも何うでもよいから習慣をつけることにせられ度候。

其習慣は自分に計りてなく他の人にも及ぼす。

兎まれ毎夜少なくとも一人已上に

如來の慈悲を及ぼさざればおかじといふ自己にちかふやうにしてすれば、つひには習慣性と爲て其つとめをせぬと自己の道心がゆるさぬやうに成てくる。

今日爲事なしに日を暮すほどつまらぬことは無之候。

阿彌陀佛は（註これは布鎌會（堂の本尊佛なり）こちらからおくり申べく候。

別紙布鎌の會堂を裁縫教場にして地方の女子に信仰心を養ふやうにしたならばよからうと存候。

丁度東京にて相當な方を見つけ候に付別紙の趣き布鎌青木氏に内々たのみ置度候。若し先日のこと未だ近くに面會せざれば郵便にて通し置のほどを依頼候。

一、女子裁縫教授

教會堂を平生は女子の裁縫教場にして、地方の女子を教養することに於ては云何

二、裁縫の教師

東京にて節儉にすれば自活の立得る位の財産を所有する叔母と姪とにて何れも軍人の未亡人にて叔母の方は先年女學校の裁縫教師をしたことある此方へ裁縫の教師として布鎌に出てほしいと談し申候處承知致され候。

三、田舎に住居致し度との事

右教師に頼みたきこと談し申候處段々考へて申さるゝには東京にて女所帯にては將來中々心配であるから寧ろ東京の家屋かし屋等を賣却して田舎に田畑を買求め小なるも住居を立て、而して會堂にて裁縫を教へ、平生は人の裁縫等をして代々田舎に住む様に致し候方が安心である故そう致し度とのこと

四、

光明會傳道師養成の基本を金にては失ひ易き故に、布鎌地方は比較的土産廉價なるを以て相當な田地一反百七十圓位なれば追々に二町位購求してほしき事。若

相當な土地が出たならば御依頼致したき事。

右青木さんに御頼申候。

一三五

如來の御慈悲を偲ばるゝ暖和なる折、其後云何候哉。さて布簾の開會式もせつばくし定めて御多忙と存候。

教會の尊影の表装は近日に出來候由、千葉上人より承はり候。出來次第小林驛迄送附すべき様千葉上人に御依頼申べく候。

廿四日夕方迄に山崎と赤荻との兩名はくり合せて當三昧會に入場しまた手傳もすべき様にせられ度候。手傳と云よりは寧ろ當人の實修の爲にてあり。此程知恩院の三昧會には田中文學士の如きは大學の教師として試験まぎはにも拘はらず夜を晝に紹での熱誠なる三昧の修養、學問に熱誠なる者は三昧の實修にも熱烈にてある。山口常照氏も同じく三昧會に入場いたし候。また吉原自覺師の如き、此等の師の如きは傳道に

も熱心非常に衆人を感動せしむる威力を持てゐる夫故自修三昧にも實に熱烈にて候。何れも生命を賭して實修いたし候。善光寺の發心者も此等の仁士に倣ひて自修また傳道共に生命を賭して修行せんとの志を引立てることに最もよき機會なればかゝる機會を逸して只ぐづ／＼月日を暮して終身傳道者としての實力もなく空しく終る如きは實に雷ひとりと自損たるのみにあらず天下の穀つぶしを養ふ如くは實に忍びざる處にて候。布鐮の準備などは左まで幾人もゆく必要なく候故自修の爲に二人は來場いたした方が然るべく存候。また來三月學園開筵につきては二人は入學いたした方が然るべく存候其故は中等教育受て居らぬと此からの世には實に垣を表にして立つ如く衆人の前に立て一生涯がヒケル様な生活をおくるは悲惨な生活をなめねばならぬわけなれば二名に入學すべき様にせられたし。

在家の人で出来る仕事に學生をつかふは人物經濟の不利にて候。また傳道をして未だ衆人に感動を與へる様な仕事できるわけでもなく布鐮に往ほどの事も兩名らは必要

なく候。

世に立て學問の方でも有爲な人物は傳道にも有爲にて自修も熱烈である。ドノ方にも天晴世に立て働くことのできぬ物にして仕舞のは實に忍びざる處にて候。何の道にても鐵が火に焼れ鎚にうたれたる千鍊萬鍛の人物でなくては實に役に立ぬ世の穀つぶしに過ぎるものである。命がけの修行せぬものは全く宗教家としてはゼロである。

田中徹氏の如きは青年の哲學者としても立派な學者としても立派である。徹氏の求道に熱烈なるまた三昧修道に熱烈なる斯る有爲な人物と折々接觸して自己を反省せぬと自己の鍛鍊を等閑に附して青年の可惜光陰を空過するは遺憾にて候。また吉原自覺師の如き演壇に立ては非常に衆人を感動させる能力を持て居る位の人物の故に三昧自修も熱烈である。兩師の如きは競ふてたとへわづかなりとも辨榮に侍して修養せんことを望み傳道の隨行を切に希望いたし居り候。うか／＼してをると日が暮れてしまふ故汝等四人も一心に求道修學自利々人の法を全くせられたし。何ものも取らず無爲の

人生を送る如なからん様に希望に耐へす候。

各三名にも宜敷傳へられんことを。

一三六

御 届

今回私共有志佛教を以て道念修養の爲に光明會なるものを組織し同志相會して修行すべき道場を設け十六七兩日を以て開場式を舉行候。同日幾千の來會有之べく依て御届に及び候也。

(註布緣教會開筵式の届)

一三七

此間中は萬に心を配り定めて疲れた事ならんと案じ候。

別れて松戸町羽生氏に訪問候處、例の會堂の相談も急に逼り其夜ゆきて見るに丁度よき程度の物なれば手に入れた方が然るべしと羽生氏が其夜取りきめて買取ことに致し

候。就て相談致し度事は貴氏が寧ろ將來傳道の爲に立つのには矢張り其不利の地にありては傳道の仕事が大に利を失なひ候。さればとて東京の如き廣き土地にてはあまりがたし、松戸位が丁度適當の處なれば將來かやうにしては云何。貴氏が傳道の根據地を松戸と定めて而して布鎌と五香は月二回位まいるやうにして五香には誰か相當せる留守居を置事にいたし貴氏は松戸にて綱川を助手として午前は自分の勉強いたし午後より夜間にかけて町内を訪問傳道いたし眞實の信仰家をつくることに盡心しては云何。折々は傳道方の研究として相當の傳道家と交際し共に傳道法を研究する様にしたならば然らんと存候。綱川も能く仕込は彼は傳道家に適して居るとおもふ。

松戸に飯料として布鎌より十俵位を取よせる事にいたして經濟の一助とし、○貴氏は天稟として先づ宗教家に適當なる良材である。然れどもまた鍛鍊充分ならず。其れを鍛鍊すべき愚柄は常に離れてそれを充分に鍛へてやらぬのが愚柄の罪にて候。實際また鍛鍊が未熟である、宗教家として土屋の如きは大に衆人に感動を與ふる力を強く

持て居る事は感心である。同氏とてもまた缺點なきに非ざるも然れども自信の強きのとまた青年を動かす力の中々つよい。今日では各地一日も空日なしに招待せられて居候。貴氏とても充分鍛鍊して天稟を充分に發揮したならば公衆にも感動を與へまた空日なしに傳道に従事する様に相成べく候。されどもまだ中々未熟であることは實際である。成べく先輩と親しみ己を成就するやうにつとめられたし。

土屋にしても田中吉原また大谷の如き何れも何とか縁合して愚衲に隨行して自己の人格の修養に汲々たるも貴氏に至つては未だ其志氣に乏しい。鐵も千鍛萬鍊して始めて名刀と爲る。自から好んで鍛られんことを願ふてこそよき器と成るなれ。釋尊のアラ、仙に師事するに非常なる苦難を受たることを世に傳られてをる。

孔子十五にして學に志し三十にして立つ貴氏も餘程時間を貴とみ宗教家としての業をつとめざれば年月過ぎ易し。

松戸位の處に在て折々東京に出て相當な人格に接せざれば人格修養成し難し、人格

に觸るのは最も自己の人格を修する最良の器である。また經濟と云事に就ても自から積極的に經營する能力も養はざればならぬ。

道譽上人の成田利生記に一心斷食して新念する夜に於て不動尊が現前し大小の二劍を持て汝此大小二劍の中何を吞ぞと仰られた、道譽曰く大を吞も小を吞も命を害ふは同一なれば願くば大の劍を吞ませて玉へと云如く、人生は向上の一路、同じ生命を賭して爲すことなれば大を以て自任せよ。

積極的進取的に奮闘すべし退引的消極的はつまらぬ。

先は當要是の如し 勿々不具

一三八

松戸の教會も出來候由、幸に今回當國にて相當な寺の住職なれども理想の傳道に従事いたし度とて弟子が宗大の卒業を機とし弟子を寺に入て自分は是から専門の傳道家と成る決心にて今回新潟より隨行いたして歸る事にて候

中村と云仁にて候。松戸教會が宜敷か布鎌が宜敷哉、兎まれ精神のヨキ方にて候。

一に如來が與玉へるものと喜び申候。

佐々木氏は既に到着したる事と存候。同氏は眞宗の青年僧りよでは實に稀に見る道心家であると同宗内の評判にて候。宜敷保護して共に道業増進の爲につとめられんことを。

今回當地にて見るに非常な熱烈な求道及び修道者の多いのには不思議と存候。

松戸の開鑑式はいづ宜敷き哉。歸京十二三日と存候。松戸は近き故東京の信者も來るべく同じくは別時三昧若しくは授戒會の開鑑式なれば別時と云もまたなれぬ故、授戒が宜しいかと存候。修行成つとめてないと機能が少なく候。而して今日は何れも皆眞面目の上にも眞面目につとめぬと宗教をして汚す恐れあり候。羽生君及び青木君にも宜敷御傳の程に希候。

今回中村師を得たる實に幸にて候。追々第三期の傳道家に成り轉する仁が有ること

存候。

學園認可願に付當國の光明會の各主任者の意見に依れば、辨榮を園長として普通中學の認可を願ふは大に不賛成と申され候。

認可を経る時は規則に拘束せられて自己の理想通りに出來申さず。

普通の僧なれば規則の（）し道を取るも然らんれども、

辨榮を規則に束ねてしまふは不賛成を唱へ候。

善導寺吉岡上人の如きは自己が長野中學の校長の經驗も有之認可學校は第一精神的教育にも拘束を被むる故に若し辨榮が光明學園の長と爲るなれば傳道家かまた唯信者の子弟を預りて全く理想の信仰を作る爲ならば大に賛成も爲るなれども謂ゆる學校屋式の學校認可經たる學校の如きは決して辨榮杯も其主任と成ることは隨喜せざるとの事。是に就て熟考するに實に然りと存候。

また一方當麻は怪雲の雲ゆき何れに成りしやまた聞かず、之を先づかたづけて内を

健全けんぜんにしてせざればならぬ。と、また

光明主義くわうみやうしゆぎの傳道でんどうが益々盛さかになりて將來しやうらいを鑑かんみるに當麻たいまの住職ぢゆうしやくとなることは云何いかににもおもふ。寧ろ獨立獨歩どくりつどくぽにしてたとへ小さき教會けうかいなりとも光明主義くわうみやうしゆぎは獨立どくりつにした方が然しからん哉やと存候ぞんこう。

就つては八王寺極樂寺わうじごくらくじに相談さうだんいたして當麻たいまの方は聯絡れんらくはして置おて誰かだれを住職ぢゆうしやくにしようとおもふ。

學園がくえんの資金しきんは作つくらうとすれば此認可願このにんかのがひに附つて有る位くらゐの物ものは來年秋迄らいねんあきまでには出來で來るとおもふ。學園長がくえんちやうは吉田氏よしだしと相談さうだんして同氏どうしを園長えんちやうにすればいかゞとおもふ。而しかして何分なにぶんの補助ほすけする様に爲せんとおもふ。

――
ますく光明主義くわうみやうしゆぎは世よに行おこなはるゝに至いたらん

光明主義くわうみやうしゆぎに犧さしげたる命いのちなれば勇いさましく

潔いさぎよく奉事ほうじしていつでも御引揚おひきあげの命令めいれい下されば
潔いさぎよく御許みもとに還かへる。

一三九

一

愚ぐ衲なふ九日かたさき高崎きたに來り十五日にらたうち當地きたに來り候さふらふ。廿日かより新潟市にひがたし善導寺ぜんだうじ廿五日にちより長岡市ながさかし
法藏寺ほふざうじ、次つぎに津川つがは善光寺ぜんくわうじ。

來五日きたるかより静岡縣しづをのけん教區けうく講習會かうしよくわい富士郡ふじこほり大宮町おほみやまち大頂寺だいぢやうじにて、次つぎに三河みかわ
廿二日にじふにち相州さうしう當麻山たいまさん無量光寺むりやうくわうじに晋山式しんざんしきを執行しつかう候さふらふ。

二

板橋智清寺いたはしちせいだより實印じついんの捺印なついんを申入候まをしいれさふらふは、愚ぐ衲なふ承知しょうちの事故ごとに捺印なついんいたすコトを福田ふくだ
んに御話みはなし置被下度候おきくだされたくさふらふ。

三

愚^ぐ納^な名^め義^ぎの烟^{えん}の内^{うち}一^{いち}町^{ちやう}分^{ぶん}のは別^{べつ}紙^し通^とり^に世^せ話^わ人^{にん}衆^{しやう}に頼^{たの}入^みた^き事^{こと}。

四

是^{これ}より光^{くわう}明^{みやう}主^{しゆ}義^ぎ宣^{せん}傳^{でん}の目^{もく}的^{てき}に^て教^{かう}師^し養^{やう}成^{せい}出^で來^きう^る限^{かぎ}り造^{つく}り^度候^{たう}。當^{たい}麻^ま山^{さん}も折^{せつ}角^{かく}に^に入^に院^{いん}した^るも教^{かう}師^しを養^{やう}成^{せい}し光^{くわう}明^{みやう}主^{しゆ}義^ぎの宣^{せん}傳^{でん}事^じ業^{ぎやう}の實^{じつ}行^{かう}するに^にあ^らざ^らば詮^{せん}な^き事^{こと}に^に候^う。

當^{たい}麻^まの會^{くわい}計^{けい}家^かを^を一^{ひと}人^{にん}置^おか^んと^とするも寺^じ務^むと勤^{きん}務^むの相^{さう}當^{たう}の習^{ならひ}も無^な之^{これ}依^よて^いし^づか^くを會^{くわい}計^{けい}を爲^なせる事^{こと}に爲^なんと存^{ぞん}候^う。

都^つ合^ごに依^よりては貴^き氏^しも當^{たい}麻^まの方^{はう}に^に其^{その}附^ふ近^{きん}に光^{くわう}明^{みやう}主^{しゆ}義^ぎの宣^{せん}傳^{でん}に從^{じゆう}事^じする様^{やう}にした^らばよ^よか^からうと^とおもふ。

教^{かう}師^しの養^{やう}成^{せい}も世^よの中^{なか}に^に在^あつ^て一^{ひと}度^ど隨^{ずい}分^{ぶん}苦^く勞^{らう}を^をした^人に^にして志^{こころ}し^{ある}者^{もの}を^を以^{もつ}て造^{つく}らうと^とおもふ。菊^{きく}地^ち明^{めい}道^{だう}も此^{この}頃^{ころ}は東^{とう}京^{きやう}に^に在^ありて妻^{つま}を^を迎^{むか}へ水^{みづ}菓^{くわ}子^し商^{やう}を^を營^いみ^をり候^うへども是^{こゝ}も後^{のち}には妻^{つま}丈^{だけ}の商^{あきなひ}を^をさ^せて明^{めい}道^{だう}に^に始^はめ^はは夜^や分^{ぶん}丈^{だけ}なりとも傳^{でん}道^{だう}に從^{じゆう}事^じさ^{せる}事^{こと}に^に（ ）と

おもふ。

菊地の様な物を何人も準教師に養ふとおもふ。新しい赤子から生れた教會の方がよいとおもふ。淨土宗でも時宗でもはや老期に成た宗旨であるから只骸骨が残て居る様な物でづん／＼發育してゆく見込はない。

基督教は至る處に青少年を養教して居る。天理教は益々發達してゆく、眞宗と日蓮は兎まれまだ活氣がある。光明主義は今妊娠中で、むまく安産が出来るか半産になるかは、何にしても如來さまに任せ申して一心不亂につとむる外はない。

貴氏も東京に出て來て基督教の傳道に就て或點まで研究しては云何。

一日／＼に日はづん／＼と過ゆくから一瞬間も循々として暮して居る時でないかう身を犠牲的に奮起すべし。

種々申述度事有之候へども後便に譲り申候。

蕭白 光明學園認可願に付き捺印して當麻に廻しに相成様御頼申候。

また東京より高田さんが念佛三昧つとめ度由、念佛三昧開發の上には有力なる宣傳に相成るべくまた將來雜誌發行につき高田さんに御頼申度事あり、實に得難き人物なれば能く御保護申してはしく存候。

光明主義が到處に行はれ候。

愚衲は廣く及ぼさざればならぬ故に

御身等は地方に於て一日もむだなる時間を費さぬやうにして

大ミオヤの御むねを世の人々にしらせて、光明のなかに生活すべきやうにすゝめられ
たし。

开は自己の力の及ばざる處なれば常に如來の御力を仰ぎて一心に御たのみすれば必
す、大ミオヤは大なる加被力を加へ王ふこと疑なし。

此頃綱川はいかゞいたして居るや。彼にも無常迅速を悟らして念佛三昧をはじむる

うに。

十二月初旬に善光寺にて三昧會或は授戒會つとむるやうにしては云何。

四日より十日迄五日間なれば卅日迄に確定せられたし。

一四一

布鎌教會は浸水夫もモウ一年耐兼候哉と思へば、、、望候。

十一月十五日より五日間會合隨喜には候へどももはや十一月一坏迄は一日の餘裕之

なく春已來約束に係ることなれば若し十二月初旬にて都合は、、、來春に延期の

やうに皆々に御傳の程を希候。

布鎌も同様にて候。

此頃到處に別時三昧大に行はれ光明主義の流通は滔々として如來大慈悲海に歸入する事は實に歡喜此事に候。

實に人生若し此光明に接せず闇黒の中に可惜生涯を葬没するは感憐の至りに候。○
 先月の元稿何れにか見失ひ候。多分松戸教會に置たる事と存候。○

何れにしてもボーロの如く熱誠にして衆生を醒すべく候。鐵を以て鐵を截る人を以て人を度す。精鍛以て成功すべし。○

大ミオヤの恩寵によつて鍛はざれば大なる使命果すことを得ず。○

一四二

大ミオヤの光明裏に新年を迎へ

無量壽の聖名を稱へて祝し奉り候

布鐻の授戒會は十五日より云何であるか。愚衲よりも照會いたし置候。廿一日より

横濱市久保山慈眼院にて五日間別時をつとめ申候。其前にいたし度候。○廿五日より
 當麻にて五日間いたして吳と青年より申出候。○

餘は後便に譲り候。○

飯田さんにもよろしく御傳、候。

一四三

先日の手紙披見候。當麻の方は誰にか執事をさせることにいたし候。至急飯田よ

り引紹ぐやう日吉氏に申込候。日吉氏より回答來り候。

來月二日松戸出張、三日より五日間講習いたし候。

光明主義至る處に行はれ候、時節到來〇ら種々の障害にも遇ひ候。けれどもまだ

〳他より迫害を被むることも實は身にしむ様な事の來らざるは全く教が盛んになら

ぬ故なり。

五香六實の小ども、せめて禮拜式丈は教へて欲しく存候。

キ瓜の根が腎臓病に効能あるとの事なれば五香六實にて何れの家にてか貰ひて能く

乾燥させていたゞき呉ほしい。

如來さまは其人の一心の深ければ深き丈、浅ければ浅き丈に御力を加へて下さることに候。

人生過易したとひ一人なりとも

大ミオヤの慈悲をしらせるやうにして、自己の天分を盡すべきやうに望ましく候。

一には自己が如來より加らるゝこと

他にわかつこと

一四四

今朝列車に乘込で而して後に返電に接し申候。

承はれば御姉様事御重恵の由云何とも人力の能ふ所にあらざれば只々大ミオヤの御慈悲の御手に御任申聖名を稱へて聖旨の在ます處を仰外なく候。

願くば御全家及び御一族のうへに専心一意稱名して大慈悲を仰ぐやうに御勧め申述候。

御訪ねかたへ、如是御座候。勿々頓首

一四五

學園資財の爲に千葉秀胤上人を頼み佛畫を製すために貴坊たち二人を練習の爲に松戸にていたし度候。本月末に歸り候。

今回京都の徳永氏も夫を手傳がてら同道いたし候。付て米は五香より一俵借受度候。秋返し申候。

教會所中村氏の方も其折能く話し申べく候。

老たる病柄世の爲人の爲に未だ曾て休んで病を養ふの日なく、數多の子らが衣食に泣く、之を見るに忍びず。

一四六

御手紙によれば名古屋の姉上のおきみには竟に不歸の客と爲られしとの事、實に世の無常なる、先に兄上に御別れ申また姉きみにも再び會ふことのできぬこととなりし御

身の心情の程察しられ候。されば只永遠に在ます獨りの大ミオヤをたより申し常恒の大光明裡に慈悲の懷に入りて先たちし人の爲に慈光の加はらんことを祈り、また世の同胞等が獨りの大ミオヤの在ますを識らず只現前の花に戯むる、蝶のごとく何も覺らずして、うか／＼と人生を闇の裡に葬りてしまふ人々をおもへば、形こそ活て居れ神は活埋めの運命に墮落して居る人々らを一人もミオヤの御手に御渡し申上るやうにして候へ。是のつとめこそ貴き職分にて候。

松戸松龍寺五重傳書正に落手候、何れ近日松戸に行候折御返し申べく候。

一四七

先日當麻より歸りは定めて雨にて困難なりし事ならんと存候。風邪は其後の経過云何哉。大分流行感冒猖獗を極め居りしやう。御自愛是祈候。

端書はめぐり／＼て一昨日着し昨朝端書差出し候。福田氏へ定めて今日の着と存候爲に今日おくればせぬ哉と存候。

すべて世の中は魔事多し。一ら大なる如來の常に加護を仰がざれば魔の爲に侵害せらるゝ恐れあり候。魔と云はゞ唯外部より計りでなく人々自己の胸中に潜める煩惱魔は尙一層、如來の加被力を仰がざればならぬことに候。

十五日十夜には出張いたすべく候。今回は出來うる限り光明主義の宣傳につとむる様、昔風の十夜會は今日は只弊のみ残り眞實の益は無之候。

人命の無常なる須臾も停り難し、自行と及び他に光明の宣傳に全力を注ぐべく候。それも自分の力の及ばざる處なれば一心に如來の加被力を蒙りて如來の聖意我に入來りて初めて如來に仕ふることをう。また如來の道を世に宣傳することをもう。

惟みるに百姓は汗と膏とを絞りて我らが日々の食物を造りて與ふ。我らは心血を注ぎて彼らに靈の食を與へざるべからず。我らは日々に三度彼らが膏を吸はざる日なし。我らが彼らに供することいかん。南泉師曰く一日耕さざれば一日食はざれと。唯唐らに坐食して銅活地獄の業を積むこと實に怖れざるべけんや。

彼親鸞師が越の寒村に専ら大悲の道を叫べとも敢て耳を貸す輩なし。親鸞泣て、此里に親の死したる子はなきかみのりの風に靡く人なしと。法藏の五劫四催と云も實は道を宣傳するについての魔心の物語である。法藏の思惟を用いざれば彌陀慈悲の宣傳はできぬ。

下總の傳道の手順は村々巡行を以て初めに其村に入り其場で禮拜儀を少し教へ其れを因縁として次に教にゆき屢々する内に光明會員を造ることにするのが手順としては便利である。昔し辨榮が巡行佛を以て村々巡行した經驗がある。

光明主義の巡行の佛畫を造り、大ミオヤの教と云標を以て天のおやさまをせらせるとの標の下に専ら弘めて大ミオヤの光明に觸れば現身も安穩に未來は淨土に、世に親をしらぬほど不幸なるはなしと云ふ意味にて、親を教ふと云宣傳。

一四八

千駄堀區安藤啓之助殿に前以て話をして置てほしい。

十夜通行の際辨榮訪問いたすべく候。同氏にして眞實に信仰出來てまた他に及ぼす様に被下候はゞ廣く及ぼす保護して呉るまた力あり候。

至誠心を以て向ふ時は何人も動かす、常に如來を念じて聖意を世に傳ふべくつとめせられたし。

一四九

御書簡によれば二人とも無事に候よし大慶此事に候。愚柄幸に魔事なく奉仕申上居候。

さて中村の事に就て通知を得て聞及び、今日は午前に中村の手紙に接して突然何の爲にかわからざりし。

中村には直に三年間は辛抱するやうにして呉と申をくり候。若し其辛抱できずして處々廻りあるくやうなことをして貰ては佛教を汚すことに成から辛抱できぬならば世に活て居つて貰ては困ると書いてやつた。

そこで本人が之を聞入ずして出てゆく曉には教會もまた雑誌も困るから。

奥村と岩品と兩人にて兎まれ繼續して呉るやうに頼み申度候。よしや中村は常識を逸して居る人として止を得ぬにしても。

雑誌の發刊の如きは主義宣傳の上に大に挫折を來すは甚だ遺憾とする處なれば中村を敢て留め置くやうに申してもどうしても逃られた曉は仕方ないから兩人にて繼續して貰度候。

京都の中井氏の如きは大學の教授を受持ちながら自分で謄寫板にて印刷してゐる。人間は何か一事業を仕遂すば活る甲斐なきものにて候。

見よ加藤咄堂氏の如き其事業せなければ父母を養ふこと出來ぬ爲に一心に著述した結果著書の大家に成られた。筆を掬るにも之を爲ねば生活さへできぬと云事にてするのが還て發達するものにて候。つひには自由に筆が立つことに相成候。

岩品と兩人してこれより筆を以て傳道することにせられたし。

盡十方無礙光の中に在ることを信する吾親愛なる教友にまで申す。

人々皆其本源身體精神も共に法身如來藏より稟けたる之を佛性と云ふ。人々皆心性は彌陀の法身を根底にしなから肉體と共に心も主我の執着と罪惡の皮殻とを被ること譬へば鑽石の中に金性の有る如くなり。

人々佛性を具備すると共に罪惡も必然的に具有したり。此の罪惡の皮を除き去りて彌陀の法身より稟けたる自己の眞性を顯現することは是自己の力の及ばざる處なり。

いかにしてか元來賦與せられたる佛性を發顯することを得るとならば、彌陀の聖旨なる本願を仰いで信じ彼の恩寵に依りて解脫し靈化する外他に道有するなし。

彌陀の本願と云ふ即ち彌陀の意志なり。あなたの聖旨とは法界に滿ち渡りて常に衆生の信仰心に感應して解脫し靈化せしむる處の勢力なり。あなたの聖旨は處として在らざるなく活動せざる處なきも信仰なき人々は空吹く風とまでも思はでむなく日

明し暮して冥きより冥きに入るものにてぞある。識に彌陀の身心は徧三法界、映三現衆生心中、是故勸汝常觀察と。言ふ心は、あなたの眞身と智慧の心は形こそなけれ何れの處にも實在していまさぬ處こそなけれ徧ねく滿ち渡る處の眞身なれば人々の心想の中に映現するので在るけれ共、衆生自ら信仰の水すまざれば之を知らずして居るのである。能く深く心を留め神を凝して觀るときはあなたの眞心の中にもとより住める我身にしてあなたの智慧と慈悲とに包れたる我心なることは確かに意識せらるゝのである。

如何に心を用て阿彌陀如來の身心の中なる我身なることを誦らかに意識せらるゝのであらうと問はゞ聖の本願の文に

至心、信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺と云ふ上の三句を安心の三心と云ひ次の乃至十念を起行の念佛と云ふのである。信者の安心起行にして最も大事のことである。

至心とは導師は眞實心と釋し、眞實心はもと佛性として自己の根底に潜みて居るけれ共我てふ迷に覆はれて人は虛假雜毒の非眞理なる心となれり。今彌陀の聖名に依りて我の迷なる事を覺りたる時眞實心と引換へて給る。あなたの聖旨は純粹なる眞理のみなれば我を捨て聖旨に隨ふ時眞實心は現はれるのである。

虛假雜毒の心にて可と思ふはあなたの聖旨を信じ得ざる故である。あなたの聖旨を得れば我てふ迷の雲はれて眞實の心月の如くに顯るゝのである。

我執より起る心は虛假非眞理にて聖旨より顯るゝは眞實心なり。あなたは眞理なり非眞理はあなたの反對なるものなり。

次に信樂とは信とは深くあなたの聖旨を信樂して疑はず。樂とは深く信順して背かざる斗りでなく信樂と云ふは深く聖を愛樂する心なり。一切の萬物の中に於て最も深くあなたを愛するなり。我身よりも命よりも凡ての者よりも聖を愛するなり。聖を愛するは自己の眞心を愛するので在り。聖を愛するが故にたとへ肉體の生命は失ふとも

聖を愛する時は此の精神を聖は眞生命の中に我を愛して攝取し給ふて無限の光と壽とに同化し給ふと吾人は信じます。人在りて汝若し阿彌陀佛を信する事を捨てざれば汝の生命を失ふべしと云はゞ余は喜んで生命を失ふも信仰を捨つるに忍びず。其故は眞生命と肉の生命とは換る事能はざればなり。たれか一塊の土と無價の金剛石を換るものあらん哉。

又一切の萬物は盡く彼の佛の有なり。故に彼を愛し彼に攝せらるれば萬物は自己の所有となるなり。

又我は全體を愛するが故にあなたを愛す。凡て萬物は一としてアナタの一分ならざるはなし全體は唯獨り絶對なり阿彌陀のみ。故に萬物にこえて獨りあなたを信じ愛樂するなり。

欲生とは即ち欲望なり。何を欲望するか即ち阿彌陀佛國なり。阿彌陀佛國とは一切萬物に超越せる眞理なり。即ち至眞と至善と至美となり。眞善美の靈界最高圓滿の處を

神の國又は涅槃界或は淨土といふ。我等の欲望此處にあり。即ち眞佛の世つぎたらん事を望むなり。凡べての物は朽ち壞する事あるも眞理の靈界は不變不壞なり。

眞理の靈界は不變不壞の故に無量壽國といふ。圓滿至善の故に報土と云ひ、最も靈福の故に極樂と云ひ、最清淨至善の故に淨土と云ふ。

終に朽ち果つべきものは最終の目的とするに足らず。非眞理は眞人の欲望する處にあらず。我等の欲望は彌陀の世つぎたらんことなり。これ無上の位置に到達して無窮に神の働きを以て所有萬類を救済せんが爲にして幸福主義の欲望を充たさん爲に彼の國を望むにあらず。

彼國に生れんと欲する者は此の生命終つて始めて生ずる者に非ず。此肉體を轉せずして、唯天然の意志を轉じて、彌陀の眞生命に入り、彌陀大我の中の自己にして阿彌陀を離れたる個人なるに非ざる事を知り、此身は彌陀の一切處に徧周せる性能を實現せんが爲の身たる事を意識して、彌陀の眞意實現として行動せば足るのみ。眞實彌陀

の眞我の中の我にして阿彌陀の生命の中の生命たるものを知り之に依つて行動せば此精神此儘無量壽の分身なり。此命を捨て始めて無量壽國に入るを待たず。

阿彌陀は此目的の爲に我等に法身より此身を分出して人間界に現出するので、眞に此理を信する時は此身も心も本より法身より分出したので、而してまた報身の光りと壽とに歸命融合して始めて眞理が現はれて來るのである。左ればとて此命終りて眞實に淨土なきに非ず。彌陀の實在は眞實にして此世界の假りのものなる如くには非ず。不變不壞にして常住なり。此身の果には實在の其眞實妙界に歸入するので、いはゞ精神が淨土に住み遊ぶのであると信すべし。

斷へずあなたの聖旨の實現せんやうに聖名を崇めて祈り奉らん事を。

至心信樂欲生我國

眞理と愛と望との三徳なり。此眞望愛の三徳は如來の勅令として若し之を具へねばならぬものなれば能く願ひ見て眞實心なるや信愛なるや靈界の欲望いばかり深

きやを顧みよ。是を安心と云ふて如來の恩寵に對する信仰心なれば是非共具へざる可
らざる必要なり。

乃至十念とは

信心の開發なり實行なり。感情 實現 平和安樂歡喜
意志 よきはたらき

眞と愛と望との意志によりて一心にあなたの聖旨の自己の心に實現せん事と日夜行
住坐臥に祈り暮らして絶へざれば、聖旨の實現として、内容に顯現して或は光明と
現じ或は慈悲の御心とあらはれ、漸々に進み行けば彌陀の中の自己なりと定まり諦ら
かに識られてよりは、内面に顯現する斗りに止まらず、口には語となりて現れ眞實語
愛語となり、身の行爲に現れては道德の行爲として菩薩の行となり來るのである。

十念とは阿彌陀佛の聖徳を表彰する聖名、聖名に依りてあなたの聖旨をうけ聖旨が
内心に現はれては佛智見開發となり心情には融合安立となり意志には實行となりて三
業(身と口と意)佛の如きの行爲に現はれるのである。之を略して乃至十念の起行門と

云ふ。

聖旨を領して信心まことに獲る時は我もなく彼もなく形質は暫く別々なれ共内心は同じく彌陀の一味の海水なれば之や諸上善人とも清淨大海衆とも申す事なり。願くば聖旨の實現せん事を祈り奉らんことを。

御慈悲のたより 中 終

御慈悲便不許複製定價二圓
昭和五年五月十日印刷納本
昭和五年五月二十一日發行
編輯兼發行人東京小石川區
水道橋二の四十四田中木又
印刷人印刷所東京市小石川
區諏訪町五十五小林七太郎
發行所東京小石川水道橋二
の四十四ミオヤのひかり社